

# らいぶ 創 REATOR

NO.60  
2012年5月  
研究広報誌

## 学びをデザインする子どもたち

～3つの対話の充実によって～

## CONTENTS

- 発刊にあたって「学びをデザインする子どもたち」によせて・・・ 1
- 本校の研究について・・・ 2・3
- 教科部紹介・スタッフ・・・ 4・5・6・7
- 共同研究開発校・・・ 8

## 「学びをデザインする子どもたち」によせて



和歌山大学教育学部附属小学校長 菊川恵三

3月、花冷えのなか6年生をおくり出し、4月、桜吹雪のなか新1年生を迎えました。毎年の風景ですが、私たちを取り巻く状況は少しずつ変化しています。昨年3月の東日本大震災、9月の台風による紀南の大水害、これらの復興への歩みは遅く、逆に過疎化・少子化は待ったなしです。私たち自身、どのように向き合うのかを考えつつ、県内外の先生方と、よりよい教育をめざして地道な努力を重ねたいと思います。

さて、本年度の研究主題は「学びをデザインする子どもたち ～3つの対話の充実によって～」です。「学びをデザインする」とは教育現場においては、課題解決のプロセスを設計することであり、その主体は「指導者」だというのが一般的です。本校ではその主体を「子ども」と置いてみることで、新しい視点を拓いていきたいと考えます。

もちろん、これは思いつきではなく、これまでの私たちの実践の中から導き出したものです。サブテーマに掲げた「3つの対話の充実」は、私たちが積み上げてきたもので、対象・他者・自己との対話を意味します。出会った対象から問題を見つけ、友だちや先生という他者と話し合い、自らの課題としてしっかり意識する。その3つがスパイラルを描きつつ高まっていくのが学びであり、それら全体をデザインする主体が「子ども」だと考えたのです。詳しくは10月の教育研究発表会を始め、さまざまな機会に紹介させていただきます。

また、多くの先生方と交流ができるよう、本年度、いくつかの点を改善してみました。6月の複式授業研究を土曜日に開催し、秋の教育研究集会を10月に戻すのはその一端です。その教育研究集会では、ここ数年お世話をいただいている東京大学大学院教授の秋田喜代美先生に加え、劇作家・演出家として知られ、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授でもある平田オリザ先生をお招きして、対談を予定しています。どのようなお話をうかがえるのか、今から楽しみです。

この他、例年の夏季教科・領域別研修会、昨年から再開したICT活用授業研究会も予定しています。どうか多くの先生方の、積極的なご参加をお願い申し上げます。このような小さな切磋琢磨こそが、未来を担う子どもたちへの糧になると信じています。

# 本校の研究について

★本年度の研究テーマ

## 学びをデザインする子どもたち ～ 3つの対話の充実によって～



研究主任  
辻本 和孝



昨年までの研究主題は「学びの質の高まりをめざして」でした。この研究主題において、「対象との対話」「他者との対話」そして「自己との対話」に視点をあて、子どもたちの変容をみとることで学びの質が高まったかどうかを検証してきました。その結果、これら3つの対話は学びを成立させるためには必要不可欠なもので、三位一体となっていられるべきものであることがわかってきました。そして、その中でも「自己との対話」に弱さがあり、充実させるためには子どもたち自身が自己の課題意識を高めなければならないということもわかってきました。

このような反省から、子どもたちが学習の主体となって課題解決を行うこと、3つの対話を大切にしたい授業をつくっていくことを目標に、本年度の研究主題を「学びをデザインする子どもたち～3つの対話の充実によって～」と決めました。

これまでも、「学びをデザインする」というテーマで多くの方が研究されてきました。そこではデザインする主体は指導者を示していました。しかし、本校では、デザインする主体を子どもたちであると考えています。そこで、【学びをデザインする】ことを学ぶ筋道を考えて課題解決に向かうことと定義し、「学びをデザインする子どもたち」とは、子どもたちがデザインする主体となり、学ぶ筋道を考えて課題解決に向かうことであると捉えています。そして、子どもたちが学びをデザインしていけるように、「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」の3つの対話を充実させていきます。



実際に研究を進めるにあたり、①聴き合い、学び合う「学級風土」づくり②協同的な学びのあり方を探る③学ぶ筋道を考える④授業記録の活用の4つをポイントとして取り組んでいきます。

①聴き合い、学び合う「学級風土」づくりでは、学級の子どもたち同士が受容的な関係となるように、各クラスで工夫をしています。どのような工夫をしているのか、その方法を共有化することで学校全体として落ち着いた雰囲気となり、子どもたちが聴き合い、学び合う姿をめざします。

②協同的な学びのあり方をさぐるでは、ペアや4人グループという形にとらわれるのではなく、一人ひとりの子どもの学びとどう向き合っていくのかという視点で、効果的な活用法を探ります。

③学ぶ筋道を考えるでは、単元・題材構成の工夫や、子どものみとりと支援から「どのような発言をきっかけにして子どもたちの学ぶ道筋がつくられたのか」「教師のどのような支援で子どもたちが学ぶ筋道をつくったのか」など、子どもたちが学ぶ筋道をつくる様相を探ります。

④授業記録の活用では、授業記録をとり、それをもとに分析を行います。その時には、着目児やその他の子どもの発言、教師の発問、を追うことによって「学びをデザインできた」場面を探り、どのようにして「学びをデザインしたのか」、その前後の学級全体の様相を分析していきます。

この4つのポイントについては、さらなる提案をしていきたいと思えます。

このように本年度から、新たな研究主題を立ち上げました。まだまだ未完成ではございますが、皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思います。

※今年度予定している研修会・研究会の案内を次頁に掲載させていただきます。ぜひ和歌山大学教育学部附属小学校へ足をお運び下さい。

研修会ならびに研究会のご案内

## 第12回複式授業研究会

◆2012年6月16(土)10時40分～16時30分

お申し込みは、web (<http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>) または、FAX (073-436-6470 まで)

## 夏季教科・領域別研修会

◆1日目:2012年7月26日(木)

《午前の部:9時30分～12時00分》

**教科・領域:社会・算数・音楽・体育**

《午後の部:13時30分～16時00分》

**教科・領域:社会・家庭・複式**

◆2日目:2012年7月27日(金)

《午前の部:9時30分～12時00分》

**教科・領域:国語・理科・生活・総合**

《午後の部:13時30分～16時00分》

**教科・領域:国語・理科・図工・学校保健**

※夏季研修会での研修内容、お申し込みは、次号にて詳細お伝えします。  
また、本校ホームページでも随時情報を提供していきます。

## 平成24年度教育研究発表会

◆2012年10月27日(土)

単式学級・複式学級あわせて全22授業を公開致します。

講演・対談 秋田喜代美先生(東京大学大学院教授)

平田オリザ先生(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授)

## ICT活用授業研究会開催!

※昨年は、web 申し込みにて先着100名限定という形で行いました。当日はたくさんお方にご参会いただきました。本年度も、「ICT活用授業研究会」として、2013年2月1日(金)に開催させていただくことになりました。詳細は、後日、本校ホームページにてご案内いたします。

# 教科部★紹介

## 国語科部 「発想力」「論理力」「表現力」を育てる

～言葉と言葉・文と文のつながりを意識した対話によって～

国語科部では、

○対象との豊かな対話

○他者との豊かな対話

○自己との確かな対話

を充実させることによって「発想力」「論理力」「表現力」を育てていきたいと考えます。

子どもたちが、主体的な学習を進めていけるような教材との出会い方や、考えを交流したくなる課題、そして次の学びにつながる振り返りのあり方を重点的に研究していきます。



北川 勝則 中田 郁子 湯浅 明菜 小杉 栄樹

## 社会科部

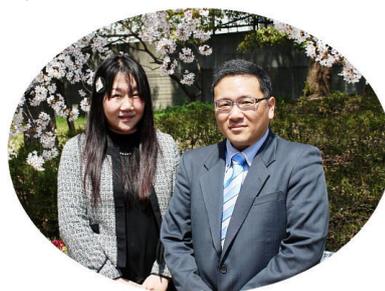
## 一人ひとりの学びの充実をめざして

～ひとり学習を全体学習の場面へ～

社会科では、全体学習の中で友だちの考えを聞き、自分の考えや思いを出し合う中での“学びの質の高まり”を目指しています。より深まる全体学習につなげるためには、ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。昨今、社会的事象は複雑化し、「ひと・もの・こと」に関する価値観も大きく変化しています。

社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め、一人ひとりがこだわりをもって追究していく学習をすすめていくことが大切です。

今年度も、子どもたちの対話によって個の「問い」「こだわり」を追求し深めていくことを大切にしていきたいと思えます。よろしくお願いいたします。



梶本 久子 松尾 光孝

## 算数科

## 子どもがつなげる算数科学習

～互いの考えによりそいながら～

算数科では、算数的活動を取り入れた学習を通して子どもたちが互いに「つなげる」学習をめざして取り組んできています。子どもたちは具体物を用いたり操作したり、式や答え、絵や図を使ったりして自分の考えを表現します。根拠を明らかにしながら自分の考えを友達にわかりやすく伝えようとします。

また、自分の考えと同じところや異なるところに着目しながら友達のことを聴くことで、なぜそのように考えたのかを予想するようになります。互いの考えによりそいながら予想し、共感し、比較しながら検討していくことで学びの質が高まっていくと考えます。

夏季公開研修会・教育研究発表会等で、日頃の実践を交流できればと思います。よろしくお願いいたします。



小谷祐二郎 土岐哲也  
宇田智津 西村文成

# 教科部★紹介

## 理科 自然事象の本質をさぐり、知の更新を促す理科の学び

子どもたちは、これまでに知っていたことでうまく説明できないものに出合ったときに疑問や問題をもつこととなります。その「ふしぎだなあ。」とか「どうして?」と思うことは、「わかりたい。」「わかった。」「なるほど。」につながる大切な気持ちです。

今年度理科部では、自然事象をさぐっていくことで、それまでに生活の中で感覚的につかんでいる断片的な知識を、結びつけたり、塗り替えたりさせていきます。そして生活的概念を科学的概念に再構成させていくような理科の学びをつくっていきます。ぜひ、7月の夏季教科等別研修会や10月の教育研究発表会にご参会ください。

みなさんと一緒に考えていきたいです。



辻本和孝・馬場敦義・中西大

## 生活科部 「自立をめざして」

～子どもたち一人ひとりが主体的に活動・体験できる生活科～

生活科での目標は「具体的な活動や体験を通して ～ 自立への基礎を養う」とあります。この活動や体験で出会うすべての“もの・こと・ひと”に子どもたちが主体的にかかわってほしいと考えています。そのため、子どもたち一人ひとりの「思い・願い」を大切に、学校生活で自然と出た“つぶやき・気付き”を活かした授業づくりを目指していきます。

また、今年度も、生活科と各教科・領域との合科カリキュラムを構築し、合科学習のあり方を考え、実践していきます。

今年度で6年目となる“和み”カリキュラムの内容を再構成し、実施していきます。



大平 陽子・居澤 結美  
中西 正子・神山 求実

## 音楽科部 「比べる」ことでせまる音楽の魅力

～思いや意図をもって表現できる子どもに～

音楽科では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して、音楽の魅力にせまります。

思いや意図をもって表現できる子どもに育てるために、

- ①表現と鑑賞の活動において、「比べる」学習の筋道を明らかにします。
- ②集中して聴く活動から、言葉などで感じ取ったことを表現できるようにします。
- ③課題を焦点化することで、対象をより深く理解できるようにします。

さらに本年度(最終年度)の重点課題として、

- ④学習指導過程「ひらく→しめす→わかる→できる/(開示悟入)」との関連を明らかにします。



江田 司

# 教科部★紹介

## 図画工作部

図画工作科では、身体全体を使ったダイナミックな活動や指先に神経を集中する活動など、視覚だけでなく、全身のさまざまな感覚を研ぎ澄ませるような活動をめざしています。

また、自然素材にかかわる機会を多くもうけ、「伝える」ことを意識した表現方法を工夫する子どもを育てたいと考えています。



笠原 彩 上田 恵 浅野 万里菜

## 生活力を育む家庭科学習

— 自己の変容を実感できる子どもの姿をめざして —

家庭科学習では、子どもたちの生活的な自立をめざし、より健康的で快適な生活を創ろうとする力（生活力）を、育んでいきたいと考えます。そのために、子どもが自分自身を見つめなおす機会をもち、「自分にできること」「自分でやれそうなこと」にはチャレンジしていく、日々の実践も大切にしていきます。

また、“ほんまもん”とのふれあい、科学的なものの見方、等を授業に取り入れながら、「こうなりたい!」という子どもの願いとよりそった、実感を伴う学びを積み重ねていきます。家庭生活を大切にしようとする気持ちを育みながら、大好きな家族のため、そして自分自身のために、よりよい生活者をめざそうとする子どもの姿をめざします。



藤原ゆうこ・武友多佳子

## 体育科（学校保健）部

### 体育科 運動が持つ楽しさを追求する学び

～どうしたら楽しくなるか、何が楽しいのかを大切に～

生涯にわたって運動に親しむためには、運動を楽しむ力が必要であり、その楽しむ力は学校教育でこそ培われるものだと考えます。そこで「技ができた」「記録がのびた」という結果だけでなく、「楽しむためにどうするか」「どんなところが楽しいのか」を考え、自分たちで運動を創っていく過程を大切に、学びを進めていきたいと思えます。

### 学校保健

従来から取り組んできた健康相談と保健指導について、この2つの相互連携と展開を考えていきます。心身の健康問題の背景（問題の本質）を的確にとらえて支援を行う中で、子どもの人間的な成長につながる保健指導のあり方が見えてくるのではないかと考えています。



則藤一起 渡辺 圭 巖村誉子

# 教科部★紹介

## 総合部 (CHANGE)

探究する学びを創る

～多様な視点で探究することも～

総合部では、体験的な学びや自ら課題を見つけ、課題に向かって粘り強く探究することを大切にしていきます。課題解決のためにひとり学習で思考を深め、全体学習で友だちと考えを出し合う中で、学びの質を高めていきたいと考えています。そして、子どもが魅力的な「ひと・もの・こと」出会いを通して、体験的な学びと課題に向かって学びの質を高めていきます。

また、今年度は国際理解や国際文化にも目を向けた実践をしていきます。



矢出 大介 谷口 佳都司

## 《複式教育部》

### 主体的に学び合う複式教育

～「学び合い」を支えるみとりと支援～

複式学級だからこそできる、ペア・グループ・異学年交流といったさまざまな学習形態を工夫し、少ない人数の中で共に学び生活する個人と個人のかかわりを重視しながら主体的に学び合う複式教育をめざします。

今年度は、学校提案「学びをデザインする子どもたち」を受け、複式学級の特性である「主体的な学び合い」の原点を再検討していきます。主体的な学び合いといっても、すべてを子どもたちに任せるわけではありません。子どもたちの主体的な学びを支える指導者のみとりや支援のあり方について研究していきます。



中西 大・北川勝則・土岐哲也

## STAFF

校長	菊川 恵三	副校長	沖 香寿美	校内教頭	辻 伸幸
1 A	上田 恵	1 B	居澤 結美	1 C	渡辺 圭
2 A	中田 郁子	2 B	中西 正子	2 C	西村 文成
3 A	馬場 敦義	3 B	小谷祐二郎	3 C	梶本 久子
4 A	湯浅 明菜	4 B	谷口佳都司	4 C	辻本 和孝
5 A	宇田 智津	5 B	小杉 栄樹	5 C	矢出 大介
6 A	則藤 一起	6 B	松尾 光孝	6 C	藤原ゆうこ
1・2 F	北川 勝則	3・4 F	中西 大	5・6 F	土岐 哲也
音楽専科	江田 司	栄 養	神山 求实	養 護	嶋村 誉子
講師	武友多佳子 (家庭科専科)	笠原 彩 (図工専科)	糸川 良夫 (理科)	浅野万里菜 (図工専科)	坂口 結 (理科)
非常勤講師	角村 会美 (養護)	大平 陽子 (生活・支援)	高瀬 優佳 (音楽)		
	前田 敏康 (理科・体育)				
	佐原ちづよ (書写)				
	Gregory Carl	Danny Lip	Dajuan Fisher		

## 共同研究開発校

教科等	学 校 名	校 長	学 校 名	校 長
国 語	和歌山市立 新南小学校	桂木 道雄 校長	和歌山市立 浜宮小学校	西端 幸信 校長
	和歌山市立 高松小学校	川端 良幸 校長	和歌山市立 加太小学校	堀 優子 校長
	和歌山市立 太田小学校	岩西 啓子 校長	海 南 市 立 大野小学校	角谷 全史 校長
社 会	和歌山市立 雄湊小学校	福田 光男 校長	和歌山市立 雑賀小学校	小松 龍三 校長
算 数	和歌山市立 吹上小学校	北畑 嘉之 校長	和歌山市立 大新小学校	北原 博男 校長
理 科	和歌山市立 宮北小学校	鎌田 淳一 校長	和歌山市立 八幡台小学校	岡 正人 校長
	和歌山市立四箇郷北小学校	貴志 年秀 校長		
生 活	和歌山市立 雄湊小学校	福田 光男 校長	和歌山市立 宮北小学校	鎌田 淳一 校長
音 楽	和歌山市立 木本小学校	池田 三明 校長	和歌山市立 吹上小学校	北畑 嘉之 校長
	和歌山市立 藤戸台小学校	三木 勇次 校長		
家 庭	和歌山市立 和佐小学校	武本多香子 校長	紀の川市立 田中小学校	辻 久夫 校長
体 育	和歌山市立 中之島小学校	湯川 泰成 校長	和歌山市立 野崎西小学校	宮本 博信 校長
総 合	和歌山市立 有功東小学校	宮本 茂 校長	和歌山市立 雑賀小学校	小松 龍三 校長
	太 地 町 立 大地小学校	堀端 勝之 校長		
図 工	和歌山市立 野崎小学校	小谷 雅之 校長	和歌山市立 松江小学校	横瀬 勤 校長
複 式	田 辺 市 立 長野小学校	柳原 修 校長	田 辺 市 立 富里小学校	森田 春樹 校長
	海 南 市 立 南野上小学校	岩橋 恭子 校長		

### From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も12年目を迎えました。  
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を  
込めています。

本校ホームページにはカラー版を掲載しています。  
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：松尾、中田、居澤、小杉、上田、則藤



和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail [fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp)